

ローマ人への手紙8章1-13節 「御霊に導かれる者」

1A いのちの御霊の原理 1-11

1B 肉における処罰 1-4

2B 御霊に従う者 5-11

1C 肉のうちにある者 5-8

2C 御霊の内住 9-11

2A 御霊による肉の死 12-13

本文

ローマ人への手紙 8 章を開いてください。8 章は、パウロがこれまで語ってきた福音、信仰による義について、大胆にまとめに入っているところになります。そこで8章をじっくりと見ていきたいので、三回に分けてみていきたいと思います。今回は 1 節から 13 節まで、「御霊に導かれる生活」について見てきます。

これまでパウロは、私たちが神の恵みを受け、キリストにあって義の賜物を受けたことを教えました。そして、いのちにあって支配していることを見ました。アダムにあっては、罪と死しかありません。罪と死が支配しています。けれども、キリストにあって義が支配し、そしていのちが支配しました。私たちは、罪ゆえに死に、神の怒りを受けるところから救われました。信仰のゆえに、義とみなされて、また義人の受ける永遠のいのちを、自分の行いではなく、信仰によって受けることを見ました。それが5章後半に書いてあります。

そして6章に入って、その罪と死の支配から解放されていることをさらに詳しく語りました。それは、キリストの内にある生活、キリストに結ばれた生活です。キリストが十字架につけられ、死なれた時に、キリストと共に私も、罪に支配されている古い自分が十字架につけられ、死にました。そしてキリストが墓からよみがえられた時に、自分も新しいいのちが与えられました。私のこれからの人生は、罪の生活に対しては死に、新しいいのちにあって生きることなのです。その生活のため、自分の手足を神に献げます。

ところが、その自分がキリストと共に死んだということが、まだ分からない葛藤を7章でパウロは書いています。それは、自分自身で神の戒めを守ろうと思っても、むしろそれは真逆のことを行っている自分がいることです。律法を守ろうとすると、かえって自分の罪が明らかになり、自分は律法によって死んだ者であることに気づきます。しかし、この葛藤をさえ、神はお許しになっています。私たちが、自分の内には何も善いものがないことを知って初めて、キリストを信じて生きることを知るからです。キリストを信じると言いながら、自分を信じて生きるという矛盾を私たちはしばしば犯

してしまいます。けれども、自分のからだ、肉には何も善いものがないことを知って、それで初めて、キリストと共に十字架につけられて死に、よみがえられたキリストとの結びつきで生きることが許されているのです。

ところでパウロは、7章6節で、「古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えるためです。」と書いていました。三位一体の第三格であられる御霊の働きをパウロは8章で語ります。彼は「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と7章24節で嘆きましたが、神が救い出してくださるのです。それは、神の御霊が私たちの内に住んでくださることによって、救い出してくださいます。救われた私たちは思いが新たにされ、神の律法に同意しています。けれども、肉には罪の律法、法則が働き、それでがんじがらめになっていました。けれども、私たちの内に神の御霊が住まれて、この方に従うことによって、肉の行いを殺すことができるのです。罪に対して死んでいる私たちが、律法に対しても死に、そして肉に対しても御霊によって死ぬことができることを、8章前半部分は教えています。

1A いのちの御霊の原理 1-11

1B 肉における処罰 1-4

¹ こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

パウロは、この前の節「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」と書いています。自分のからだには罪の律法が働いているけれども、主イエス・キリストにあって、罪に定められることは断じていないと確認しているのです。パウロが、3章21節以降で語った内容ですね。「3:21-22 しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。」神の律法には心から同意しているのに、罪のからだをそれを守れなくしている。だからといって、自分は罪に定められることは決してないのだ。律法とは関わりなく、イエス・キリストを信じる信仰によって、義と認められているのであり、肉の弱さによって罪に定められることは断じてないのだ、ということなのです。

ここで、「キリスト・イエスにある者」とあるのが大事です。キリストを信じる者たちは、キリスト・イエスの内にいるのです。これは立場であり、自分の行いとは関係がありません。キリストの内にあるので、その義が私たちにも賜物として与えられていて、神が私たちを見る時に、罪深い私ではなく、キリストにある私を見てくださいます。つまり、まるで罪を犯していないようにみなしてくださるのです。そして、この立場をしっかりと確認し、保っているからこそ、罪から離れた生活をする事ができます。立ち位置を忘れては、決して歩むことはできません。赤ちゃんが成長して立つことを知らないで、歩くことは決してできないのと同じです。

² なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。

午前礼拝で詳しく説明した通りですが、キリスト・イエスの内にいることによって、いのちの神の御霊が働いてくださいます。律法の行いではなく、信仰によって生きることによって、内に住まわれる御霊が働いてくださり、罪と死の原理から解放されます。それを、物が下に落ちる重力の法則があっても、空気力学の法則によって、重い物が空中を飛ぶことができるという例えで説明しました。重力が今もあるように、罪と死の法則は今も働いているのです。自分のからだには、罪の法則が働いているのです。けれども、いのちの御霊の原理が働いているので、罪と死の法則に抗い、勝利することができるのです。

³ 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。⁴ それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。

7章においてパウロが葛藤していたことを、ここではっきりと語っています。律法は聖く、正しく、良いものですが、肉には罪があり、罪の原理が働いているために、それを守ることができません。しかし、その、私たちの肉ではできなくなっていることについても、神がすでに代わりに行ってくださったのです。再び神の恵みです。私たちの代わりに、神がキリストにあって、律法の要求を満たしてくださいました。キリストを、肉体を持って遣わし、この方が律法の要求を満たしてくださいました。

「神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で」とあります。ここで大事なのは、「同じような」とあることで、同じとは書いていないことです。「ヘブル 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」罪は犯さなかったのです。けれども、私たちと全く同じように、ご自分の肉体において弱さを身にまட்டுておられました。悪魔から、誘惑さえ受けられたのです。けれども、罪は犯されませんでした。

その肉体は、ヘブル書で詳しく書いていますが、「罪の清めのため」のいけにえとして献げられるために、与えられていたのです。「10:10 このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだは、ただ一度献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。」そして、この「肉において罪を処罰されたのです」とあります。私たちの肉の弱さによって、罪を犯してしまう。それで、罰せられてしまう。こういったことを神はキリストにあってすでに処理してくださいました。

そこで4節に、「肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに」とあります。律法の要求が、私た

ちによって満たされるのではなく、私たちのうちに満たされているのです。なぜなら、身代わりに罪の処罰を受けてくださったキリストが、私たちの内におられるからです。律法の要求は、すなわち、律法に違反した者に対する死罪です。それを受けてくださった方が、私たちの内におられるので、その要求は満たされているのです。そして、どのようにして、キリストが内におられるのか？ここにあるように、「御霊」によってです。御霊が住んでおられることによって、キリストが住まわれます。

2B 御霊に従う者 5-11

そこで私たちは、「肉に従わず御霊に従って歩む」者になりました。どのように歩むのか、まずは、肉に従うとはどういうことかについて、パウロは話します。

1C 肉のうちにある者 5-8

⁵肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。

肉に従うことと、御霊の従うことの大きな違いは、「考える」ことに表れます。「思い」が、肉と御霊との戦場になっていると言ってよいでしょう。私たち人間は三つの部分に構成されています。霊と魂と体です。「思い」というのは「魂」の部分の領域です。「思い」は、私たちが霊によって支配されているにしても、肉によって支配されているにしても、その影響力を持っている方に反応します。

肉体の欲求は、空気を吸うこと、水への欲求、性欲、食欲などいろいろあります。それ自体は悪いものではなく、むしろ神に支配されているなかで、神の栄光のために用いることのできるものです。しかしアダムによって罪と死が世界に入ってから、肉の欲求が私たちに支配するようになりました。過度の欲求を聖書では「情欲」と呼びます。神が与えておられる境界線を越えて欲求を満たすことです。例えば、夫婦の中の性欲は祝福されますが、それ以外の関係での性欲は情欲です。けれども、御霊によって生まれると、霊が生きます。そのため、思いもそれに反応して、神を考えるようになります。神の正義について、平和について、御霊に属することを思うようになります。

⁶肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。

ここの「死」とは、神のいのちから遠く離れた行いの数々のことを話しています。「6:20-21 あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義については自由にふるまっていました。21 ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です。」神のいのちから遠く離れた生活です。そして後に神の御怒りを受ける生活です。そうだったことを、肉に支配されていると思っているのです。

けれども、「御霊の思いはいのちと平安です」とあります。御霊に導かれていると、神のいのちにつながっています。そして、神と調和しているので、思いは平安で支配されています。イザヤが、

平安の与えられている者と、悪しき者の対比を預言しています。「57:19-21 わたしは唇の実を創造する者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼を癒やす。——【主】は言われる——20 しかし、悪しき者は荒れ狂う海のような。まことに、それは鎮まることができず、その水は海草と泥を吐き出す。21 悪しき者には平安がない。」

⁷ なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。

あまりにも明確に書いています。イエス様が、「ヨハ 15:5b わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」と言われたことを、パウロはここで「肉のうちにある者」として説明しています。私たちがどんなに、高尚なことを考えていたとしても、肉には罪の律法が働いていますから、必ず神に敵対します。旧約聖書で、神の民が神に背いている姿が描かれていますが、それはまさに、私たちのありのままの姿です。肉とはそういうものなのです。

そして、神に敵対するとは、神の律法に従わないことです。神の命じられていること、言われていることに従わないで、「いやだ！」ということです。そしてパウロは、さらに、「いや、従うことができないのです。」と言っています。そう、従うことができなくなっているのです。律法に対して、肉は無能なのです。これを知らないで、自分を良くしようとすると、クリスチャンならず、クルシ(苦し)ちゃんになってしまうのです！

⁸ 肉のうちにある者は神を喜ばせることができません。

パウロは、「肉のうちにある者」と言っていますが、次 9 節以降に、「御霊のうちにいる」とことと比較しています。神を喜ばすのに、肉のうちにいる者はそれをすることができません。思い出すのは、アブラハムが努力して自分を継ぐ子が、神の前で全く否定されたことです。サラとの間に子が与えられていなかったため、サラの女奴隷ハガルを通して、イシュマエルが生まれました。彼が 13 歳の時に、神は、「いや、サラから生まれる子が相続するのだ。」と神が言われました。アブラハムは、安泰だと思ったのに、一切否定されたのです。肉によるものは、それがどんなに優れているように見えても、神を喜ばすことは決してないのです。「私は、こんなに努力しているのに、なんで認められないの？」という疑問をぶつけても、神は全く意に介することはありません。

ところで、ヘブル書 11 章には、「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。(6 節)」とありますね。律法の行いではなく、信仰によって生きることをパウロは強調していますが、信仰によって生きることと、御霊の内にいることは直結しています。神がキリストにあってくださったことを、キリストに結ばれている者として信じて生きていく時に、御霊が働いてくださいます。けれども、自分で律法を守り行おうとする時には、肉が働きます。なので、律法を守り行えないどころか、ことごと

とく違反して、罪深くなってしまいます。神の恵みと信仰、そして御霊の働きはいつも、一つになって出てきます。律法の行いと肉も、一つになって出てきます。

2C 御霊の内住 9-11

⁹しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにはなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

キリストを信じている者には、御霊が内に住まわれるという約束が与えられています。「Ⅱコリ 1:22 神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。」そして御霊が内に住まわれているならば、御霊の内に自分はいるのです。ですから、もはや肉のうちにいる者ではなく、御霊の内にいるのです。御霊が内に住まわれているという、もっと自分を助けてくださる方という働きですが、自分が御霊の内にいるという、御霊が主導的に自分を導いている、ということになります。

そして大事なのは、御霊は、「キリストの御霊」なのです。御霊がおられるということは、キリストがおられることなのです。イエス様は、「もうひとりの助け主」と聖霊と呼ばれましたが、同じ性質のもうひとり、という意味のギリシア語になっています。ご自身と同じ性質の助け主であり、御霊が住まわれるということは、キリストが住まわれています。キリストは神の右の座に着いておられるのに、どうして私たち一人一人のところにおられるのでしょうか？聖霊によって、なのです。

ここでつながります。キリストに結ばれた生活とは、そのまま御霊に導かれた生活なのです。私たちは自分の肉で律法の要求を満たそうとする生活には死にました。そして、よみがえられたキリストにつながり、結ばれている生活に入っています。そしてその生活は、御霊によってもたらされています。そこで、次の話につながっています。

¹⁰キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなっています。

これが、私たちの立場です。私たちは、依然として、死ぬべきからだを持っています。罪があり、それでこのからだに従えば、霊的にも、肉体そのものも死にます。けれども、キリストがおられるので、御霊がそのからだをも神に従わせ、義のゆえに生きるようにしてくださるのです。分かりやすく例えるなら、私たちが下半身不随だとします。けれども、キリストを信じて受け入れているならば、イエス様は御霊という、超自然的なギブスを与えてくださっている状態です。そのギブスは機械が内蔵されていて、中にある足を動かすようになっているとします。そんなのは実際にはないので、想像してください。そうすれば、完全に不随なっていて動けない足ですが、御霊というギブスを着用し

ているので、そのギブスが不随の足を動かしてくれる、とうような、それを動かす力を与えているということです。死んでいるのに、御霊の力なのに生かすことができるのです。

¹¹ イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてください。

「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊」として、イエス様の復活に御霊が関わっておられたのです。御霊の働きについて、私たちはあまり気にしないでいます。それは、御霊こそが三位一体の位格の中で、最も身近な存在だからです。この方は黒子のようにして、キリストの栄光を証し、キリストは父なる神ご自身の栄光を現しておられるのですが、黒子のようにイエス様を証しているのです、目立つように動いておられません。けれども、キリストのお働きにおいていつも関わっておられる方です。

イエス様が処女から生まれる時は、聖霊の力によってマリアが身ごもることを、ガブリエルは彼女に伝えました。バプテスマをイエス様が受けられる時は、聖霊が鳩のように降りてこられて、それから御霊に導かれて荒野で悪魔から誘惑を受けられたし、イエス様はご自身を冒瀆する罪は赦されても、聖霊を冒瀆する罪は赦されないとまで言われました。そして、イエス様の十字架と復活に、御霊が関わっておられます。十字架について、ヘブル 9 章 14 節にこう書いてあります。「まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」そして、ここにあるようにこの方がよみがえられる時に、神の御霊がよみがえらせたのです。

そしてパウロは、御霊がイエス様をよみがえらせたのだから、同じようにして、私たちの内に住まわられて、この死ぬべきからだも生かして下さるのです！これが、2 節で言っていた、いのちの御霊の原理です。罪と死の原理はからだにまだ働いているのです。けれども、その死があっても、なおのことよみがえりの力で、生かして下さいます。私たちが知らなければいけないのは、この全能の力が信じる者に働いているということです。もちろん、将来、このからだは復活するということと、その力を期待し、希望を持てますが、今、肉に対しても御霊の力で抗い、打ち勝つことができるようにしておられるのです。

2A 御霊による肉の死 12-13

そこで、私たちはこの原理、いのちの御霊の原理を自分に適用しないといけません。御霊の導きに、自分を従わせるという応答をします。

¹² ですから、兄弟たちよ、私たちには義務があります。肉に従って生きなければならないという、肉

に対する義務ではありません。

義務と言っていますが、パウロは素晴らしい自由が与えられていることを、初めに示唆しています。肉に従っていきなればいけないという義務はもうないのだよ！ということです。今、自分が肉の欲望にいつも負けていて、どうしてもこれをやりたくなくなってしまおうとして悪い習慣を残しているとします。でも、いつでも御霊の力によってやめる自由が与えられているのです。私はこの罪を犯さざるを得ないのだという、義務はもうなくなったのです！義の奴隷にはなりましたが、罪の奴隷状態からは解放されています！

¹³もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。

これが、私たちの義務です。もし肉に従い続けているなら、そうやって生きているならば、神のいのちから離れて死ぬこととなります。けれども、決してそのようにはなりません。御霊が内におられるからです。御霊に導かれることによって、初めてからだの行いを殺すことができます。そうすることによって、生きるのです。

私たちは、からだの行いに対して、同じ肉によって殺そうとしてしまいます。けれども、それは自分の頭の髪の毛をひっぱって、空中に浮かぼうとするほどのできないことです。けれども、キリストを信じている中で、御霊が働いて下さり、導いてくださいます。助けくださいます。この方にまかせて、自分を従わせる時に、からだの欲望を満たさないでよくなるのです。「ガラ 5:16-18 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。17 肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。18 御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。」

こうして、私たちは、いくつかのことに対して死ぬことを学びました。罪に対して死んでいるとみなします。次に、律法に対しても死んでいるということを知ります。そして、御霊によって肉を殺すのです。こうやって、自分がキリストと共に死んでいて、よみがえりのキリストが自分の内に生きるように、自分を任せます。神の恵みが働くようにさせるのです。そして、決して、自分自身に焦点を合わせないようにしてください。自分が克服できない罪があるのは、罪への愛があるからです。それがいかに魅力的か知れませんが、事実、魅力的なのです。けれども、神はその欲望を抑え込むよりも、もっと魅力的な方を与えてくださいました。イエス様です。この方の愛に満たされるなら、自ずと自分というものから離れることができます。この方で平安になれているなら、虚しさや孤独を他のもので埋めようとしなくなっていきます。御霊の力で、肉の行いを殺し、生きるのです。